



視点

「性」を学ぶことは 「豊かに生きる」こと

男尊女卑、性別役割分業の空気にどっぷりつかって少しの気持ち悪さを感じるものの、疑うことをしないまま結婚、出産を終えて職場復帰した頃、養護教諭が読む月刊誌「健康教室」に連載された村瀬幸浩さんの「よりヒューマンな性をもとめて」に出会い、すっかり魅了されたのが性教協との出会いです。「もっと知りたい」「もっと学びたい」という気持ちで、1986年岡山での第5回全国セミナーから参加し、88年の広島サークル発足にも加わりました。「科学・人権・自立・共生」を柱にした性教協での学びは、人が「豊かに生きる」ための要素がぎっしり詰まっていて、私自身の生き方や価値観も豊かで気持ち良いものになったと実感しています。関わった子どもたちにどう伝えていこうか考え、教育内容を創る活動も充実した時間でした。

しかし、98年から始まった「文科省は正指導」という名の教育統制により広島県の実地現場は様変わりしてしまいました。人権教育や平和学習が潰され、「校長権限の確立と職員会議の適正化」という名のもとに、それまで教職員全員の意見をもとに教育活動を創造できていたのが、管理職と一部の役職の決定で決められるようになり、物言わぬ教職員づくりが進み、自主編成の授業も難しくなりました。その直後に始まった性教育・ジェンダーフリーバッシングも重なり、私自身もあからさまに管理職から「性教育はやめてくれ」と言われたり、町議会で日本会議系議員から非難されたりしてブレーキをかけられました。しかし、もちろん、性教協での学びは続けました。

それでも最近の社会の変化は性教協が求めている方へ進んでいます。「性的同意」もその一つです。

しかし長い間小規模校に勤務し、ここ9年間はほとんどの児童生徒が他地域から通学する少人数

の現場にいて思うことがあります。その子たちの多くは、自分に自信がなく、自分の気持ちを認識すること、自分を表現することが最も苦手です。大きな集団の中では授業の内容に「わからない」と表現できず、助けを求めるスキルもなく、じっと目立たぬように過ごしてきたのかも知れません。その背景は様々だし、そのことに気づいて個別対応できるだけの教師の数もゆとりも不足しています。教師への反発や校則破りなどでアピールできる方が表現力を持っているとも思えます。

そういう自己表現や人との関係づくりがとても苦手な子たちは、「嫌な時はイヤと言っていんだ」「困ったときは誰かに助けを求めよう」「自分の感情を大切にしよう」という当たり前のことさえ困難なのです。今年から広島県の高校入学者選抜制度が大きく変わり、「自己表現」が加わりました。「自己を認識する力、自分の人生を選択する力及び表現をする力」を個別に10分間の面談形式で採点されます。県教委は「今まで取組んできた『教育改革』と学校の『自己開示できる安全・安心な環境と信頼関係』で、この力が育まれてきている」と言います。現場の実態や子どもたちの実情を考えると、驚きと疑いと腹立たしさの感情が出てきます。

42年間の養護教諭としてのフルタイム勤務を今春には終える予定です。学ぶこと、自分にできることを今後も続けていきます。



馬屋原信恵
(広島サークル)